

むかし、あるところに、ひとりの息子がいました。あるとき、母親にいつかつて、なすびの苗を買いに行きました。

息子が百文出して、

「これで買えるだけの苗を売ってくれ」というと、苗売りのおじいさんは、

「これは、実が何千何百となるいい苗だよ」といつて、苗を一本だけくれました。

家に帰ると、母親は、あきれて、

「何でもつと安いのをたくさん買って来なかったんだ」としかりました。けれども、息子は、

「これは一本百文でも、実が何千何百つてなるんだ。悪いのをたくさん買うより、こつちの方が得だと思ったんだ」といいました。

息子は、苗を畑に植えて、毎日毎日、水やこやしをやって大事に育てました。苗は、ずんずん大きくのびて、見上げるような大木になりました。そして、とうとう、天まで届きました。

やがて、なすびの大木に、雲がかかったように美しいむらさきの花がさきみだれました。花が終わるとひとつひとつが実になりました。

七月七日になると、母親が、息子に、

「今夜は、たなばたのお祭りだから、たなばたさまになすびをお供えしよう。おまえ、木に登って、なすびをもうでおいで」といいました。

息子は、なすびの木にはしごをかけて登って行きました。登って登って、とうとう雲の上に出ました。すると、雲からつき出たなすびの木の側に、りっぱな御殿がありました。息子は、

「こいつはおかしな所に来たもんだ」といつて、あたりを見回しました。すると、御殿の座敷に、白髪のおじいさんがすわっていました。息子は、

「わたしは、日本からなすびを取りに来た者ですが、こんなにたくさんっているから、取って行ってもいいでしょうか」とききました。おじいさんは、にこにこして、

「ああ、このなすの木はおまえさんの物か。おかげでわしらは毎日ごちそうになっている。さあさあ、かつてに取って行っておくれ」といいました。そして、

「せつかくここまで来たのだから、上がって、ゆっくり話でもしてお帰り」といいました。

息子は、いわれるままに座敷に上がりました。すると、美しい娘がふたり、ごちそうを持って出てきて、あれこれともてなしてくれました。息子は、いい気持でくつろいで、たくさんごちそうになりました。

やがて、おじいさんが、のびをしながら、

「やあ、思わず時がたってしまった。娘たちよ、したくをしろ」といつて立ち上がりました。そして、となりの部屋に引っこみました。じきにその部屋から、とらの皮のふん

どしをした人が出て来ました。頭にはつのが二本も生えて、口は耳までさけています。

「わあ、おにだ！」と、息子は腰をぬかしてしまいました。その人は、笑って、

「これこれ、わしはさっきのじいさんだ。これからちよつと仕事にかからねばならんでな」といいました。息子が、

「仕事って、人を取って食うのですか」ときくと、

「それじゃあ、まるで鬼ではないか。じつは、わしはかみなりでな。これから少し、下界に夕立ちをふらせてやらねばならん。どうだ、おまえ手伝ってくれないか」といいました。息子は、

「では、とにかくやってみましょう。何をすればいいですか」とききました。

「一番やさしいのは、雨をふらせる仕事だから、それをやってくれ」

かみなりさまは、息子に、ひしやくをひとつ渡しました。

「そのひしやくの中には、雨がいつぱい入っているから、それを注げばいいだけだ」

「わかりました」

かみなりさまは、七つ太鼓を背中にかついで、両方のつのに雲をひっかけてかけだしました。後から娘たちが、鏡を持って、ぴかぴかさながら走って行きました。息子は、ひしやくから雨を注ぎながら、雲の上を飛び回りました。

下では、たなばたのお祭りで、ほうぼうの村では、神社に集まって、ピイピイカラカラと、にぎやかに笛をふいたり太鼓をたたいたりしていました。そこへいきなり夕立ちが来たので、みな大騒ぎです。

そのうち、息子の村の上にやって来ました。息子は、村の人たちをからかってやれと思って、かみなりさまと娘たちに、うんと太鼓をたたいて鏡を光らせてもらいました。そして、ひしやくをふり回して夢中で雨をふらせました。村の人たちは、くもの子を散らしたように逃げました。息子はおもしろくてたまらず、大笑いしているうちに、思わず雲をふみはずして、どんと下に落ちてしまいました。そして、畑の側の、くわの木にひっかかってしまいました。

かみなりさまは、息子をかわいそうに思って、それから、くわの木には落ちないことにしました。だから、今でも、かみなりの鳴るときには、くわの小えだをおって来て、軒端（のきば）にさすのだそうです。

おしまい。

原話…『江刺郡昔話』佐々木喜善／郷土研究社

再話…村上郁